

【研究論文】

## 教育実習指導の現状と課題（Ⅱ）

～教育実習Ⅰを中心に～

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 准教授 佐伯 育郎

初等教育学科 教授 徳本 達夫

### はじめに

筆者らは、先にそれぞれの専門科目担当者の立場から教育実習指導の現状と課題について明らかにした。教育実習は、大学における教職課程教育の一環として位置づく。文部科学省が時代の要請として強調している教職課程教育の質保証とは、大学教育の質保証と連動する。それはまた、各授業担当者の授業の質保証を前提とする。教員自身は普段の授業実践を通して、自身の授業内容と方法の改善に向けて不断の努力を重ねている。専門職従事者としての不可避の営みとしてである。一人ひとりの授業実践の質的向上が総体としての大学教育、そのなかの教職課程教育の質的向上に繋がる。

大学教育の質保証の評価は、長期的には大学卒業後の家庭・地域・社会・世界等における卒業生の生き方・仕事の仕方等に現われる。短期的には学生の大学外での活動、とりわけ教育実習等によって露わになる。その意味では、教育実習という外部評価を常に、大学教育、教職課程教育の質的充実の指針とすることは教職課程教育を持つ大学の社会的使命であり、責任である。

前稿でも強調したように、筆者らが教育実践において重視してきたのは、教員の資質能力に必須の省察性・同僚性・協働性を育む取り組みである。教員養成研究の今津孝次郎も強調するように、教育の成否は教員がそれぞれの専門性を持って、同僚と学びつつ、けんかに近いやり取りができ、かつ仲の良い職場である。常に子どもとともに学ぶことのできる職場環境である。

その意味では、上記の資質能力の形成につながる経験をどこまで養成の段階で保障するかである。教育実習先で学生が学ぶことは多々ある。養成段階で主体的に学ぶ姿勢を身に付けた学生の学びは、相対的に質と量が高くなる。段階性・主体性・総合性という観点を指導の基本方針におくことは、学生の力量形成に有効である。このことは、前稿でも明らかになっている。教職の専門性は、高度な自律性にある。状況を的確に判断し、それぞれの状況に最適な関わり方を求め続ける姿勢が教育実践の質を高め続けることに生かされていく。このことは、中央教育審議会の答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（平成24年8月28日）の考えを具現化することでもある。

以下、(Ⅱ)では、教育実習Ⅰ（実習の事前学習）を中心に、模擬授業体験を通して学生に形成すべき学習観点がどこまで達成できているか。課題は何か。学生の課題と、教員の課題とを明らかにし、今後の展望を述べる。(Ⅲ)では教育実習Ⅱ・Ⅲ（本実習）を中心に、学生が大学教育での学びと教職課程教育での学び、わけでも教育実習の事前・事中・事後指導をどう繋げたか。その成果と課題を明らかにする。一連の教育実習体験を通して学生が自己形成すべき資質能力がどのように体得されているか。学生の課題と、教員の課題とを明らかにし、今後の展望を述べる。

(Ⅱ)(Ⅲ)を連続した報告として提示する。実習体験当事者である学生、同業者各位の忌憚のないご批正を賜りたい。なお、執筆は討議の上で進めているが、文責については末尾に記した通りである。(徳本)

# 1 平成25年度・教育実習Ⅰ（小学校）の実際

初等教育学科の小学校・教育実習は、表1のような段階から成り立っている<sup>1)</sup>。いわゆる「分散・積み上げ方式」をとっている<sup>2)</sup>。本学科における教育実習の特色は、①省察性②協働性③同僚性④段階性⑤主体性⑥総合性である<sup>3)</sup>。3年次前期の教育実習Ⅰは、3年次後期の教育実習Ⅱ・Ⅲの事前事後学修であり、グループに分かれて教材研究・模擬授業を行う。教育実習Ⅰは、教育実習Ⅶと教育実習Ⅱ・Ⅲとをつなぐものであり、各教科教育法を中心とした大学での学びと小学校での教育実習とを架橋する実習でもある。

【表1：初等教育学科2～3年次の教育実習】

実習の名称・単位	開講時期・実習校	授業コマ数・実習期間	ガイダンス・報告会
教育実習Ⅶ（観察・参加実習） 選択履修 1単位	2年次 前期 6月（広島県内協力校）	15コマ分 1週間	事後学習会 内諾訪問ガイダンス
教育実習Ⅰ（事前事後学修） 小免必修 1単位	2年次 2月 3年次 前期	1コマ分（オリエンテーション） 17コマ分	教育実習事前ガイダンス
教育実習Ⅱ・Ⅲ（本実習） 小免必修 4単位	3年次 後期（出身校等）	20日間（4週間）	教育実習報告会

教育実習Ⅰのねらいと概要、到達目標は、以下の通りである。

「本実習（教育実習Ⅱ・Ⅲ）に臨むにあたり、実習生としての確かな心構えと教育実践力を養うことを目標とする。前年度に終えた観察実習（教育実習Ⅶ）の体験をふりかえり、教材研究や指導案作成の仕方等をより深く学習する中で、事前に取り組むべきことを明確にする。小グループに分かれてからは、実際の教材研究や教材開発、模擬授業に取り組む。授業外の時間を活用して、模擬授業に関する担当教員との打ち合わせを行い、指導を受ける。本実習終了後は、実行委員会を中心に実習報告会を企画・運営・実施し、学習のまとめとする。」

- ① 各教科・領域の復習、参考資料の収集、指導技術・指導法についてのレポート課題に取り組み、基礎をかためる。
- ② 各教科・領域の学習指導案について理解し、自分で書くことができる。
- ③ 教材研究・教材開発に取り組み、教材・教具等も準備することができる。
- ④ 学習したことを活かして、授業者・学習者として模擬授業に取り組むことができる。

平成25年度・教育実習Ⅰの具体的な実施計画は、次の通りであった。

【表2：平成25年度・教育実習Ⅰ（小学校）実施計画】

講数	実施日	学習内容
第0講	2/8	教育実習Ⅰオリエンテーション……趣旨説明、グループ決め
第1講	4/12	全体会……教師からのアドバイス、春期課題の提出、諸連絡
第2講	4/19	全体会……教師による示範授業、今後の取り組みについて
第3～5講	4/26, 5/10, 5/17	第1クール 模擬授業Ⅰ～Ⅲ
第6～8講	5/24, 5/31, 6/7	第2クール 模擬授業Ⅰ～Ⅲ
第9講	6/14	4年生との「実習報告会」引き継ぎ会（教育実習報告会実行委員のみ出席）
第10～11講	6/21, 6/28	第3クール 模擬授業Ⅰ～Ⅱ
第12～13講	7/5, 7/12	第4クール 模擬授業Ⅰ～Ⅱ
第14講	7/19（1コマ）	教育実習Ⅱ・Ⅲ（本実習）事前説明会
第15講	7/19（3コマ）	代表者による全体研究授業Ⅰ
第16講	7/26	代表者による全体研究授業Ⅱ
第17講	8/2	全体会……教師による総括・激励、教育実習Ⅰの振り返り

第0講は、主担当教員から授業の趣旨や春期休業中に取り組む課題について説明した。課題は、教育者による授業実践や指導技術・指導法等に関する文献のレポート作成、グループで担当する4教科・領域の学習指導案・先行実践例の収集である。2年次の各教科教育法についての復習、学習指導要領・解説の熟読も含まれる。レポート作成によって、様々な教育者の教育理念・教育実践を学び、自身の取り組みの下地をつくる。各教科教育法についての復習、学習指導要領・解説の熟読によって、自身が担当する授業が、児童のどのような力量形成のためにあるのかを理解する。学習指導案・先行実践例の収集によって、教材研究の参考資料として活用する。4月から模擬授業を行うにあたり、これらの事前学修が必要になる。

【表3：平成25年度・教育実習Ⅰ（小学校）グループ一覧】

グループ（人数）	第1クール	第2クール	第3クール	第4クール
Aグループ（8人）	国語	音楽	理科	体育
Bグループ（8人）	音楽	国語	体育	理科
Cグループ（9人）	理科	体育	国語	音楽
Dグループ（8人）	体育	理科	音楽	国語
Eグループ（9人）	社会	図工	算数	道徳
Fグループ（8人）	図工	社会	道徳	算数
Gグループ（9人）	算数	道徳	社会	図工
Hグループ（8人）	道徳	算数	図工	社会

グループ決めでは、例年8グループに分かれて各教科・領域の模擬授業に取り組む。学生が所属する専修では、その教科の模擬授業を体験している場合が多い。学生は、自身の専修の教科が含まれていない方のグループに属する。グループ決定後、代表者・副代表者を選出する。代表者は、教育実習報告会の実行委員も兼務する。グループの目標、担当教科・領域や模擬授業の順番等も決める。今年度の受講者は67人であり、8人班が5グループ、9人班が3グループの編成であった。

本学は双方向の授業を重視している。教員からの一方通行的な指導では、学生の学修に資さない。双方向性確立の方法として、コメントシートの活用他、随時学生からの質問・相談に応じている。コメントシートには提出物チェックリストも設け、自己管理させるように促している（資料1）。毎回、学生は授業の振り返りを行うことで省察し、記入したコメントシートを担当教員に提出する。担当教員は、所見を読んで次の授業時に学生へ返却する。教員からの所見は、学生に対する激励や課題への示唆等である。学生は教員の所見を読んで自身の取り組みにフィードバックさせ、次の歩みへとつなげていく。「流れは頭に入っていたが、やっぱりみんなの前に出ると抜けていることが多かった。話し方について、自分も気付いたが、しっかりと意識したい。反省点が多かった」（学生）「模擬で反省点が見付かるのは良いことです。次は改善あるのみ。」（教員）といった相互のやりとりから、学生が自身の改善点に気づき、教員の所見によって次の授業への意欲を高める材料となっていることが読み取れる（資料1）。

第1～2講の全体会では、各教員からの諸連絡・激励、代表教員による示範授業等を行う。第2講の代表教員による示範授業では、教科指導のあり方、教材研究の仕方、模擬授業・協議会の進め方等について教員から具体的に学ぶ。15分の模擬授業、15分の協議会を実施することで第1クールからの学びのモデルを示す。協議会では、教員が進行を行い、授業者の反省・振り返り、質疑応答、授業者の感想、司会者による総括（成果と課題）といった一連の流れを学生に掴ませる。今年度の示範授業は、道徳と音楽であった。

第3～11講では、グループ別に分かれて学生たちが模擬授業を行った。第1～4クールで、4教科・領域の模擬授業を行う。15分間の模擬授業と15分間の研究協議会を行う。授業者の学生は、教員として授業を行い、他の学生は児童役となる。授業者はもちろん、児童役となることも模擬授業での大きな学びである。児童になりきることは難しい。学年や発達段階を考慮しつつ、予想される反応を想定して演じなければならないからである。児童役での学びは、授業者として実践する際にも役立つ。協議会では、授業者自身の反省・振り返り、質疑応答、担当教員による助言、司会者による総括等を行い、感想・意見を交流する。教員、児童役の学生は、各教科・領域共通の「模擬授業評価表」に記入

し、毎回授業者に渡している（資料2）。態度・姿勢、内容、板書、発問、対応、時間の6項目について記入することで、授業分析の方法を実践的に学ぶ。授業者も自己評価をすることで、授業を省察する。このような取り組みを通して、グループ内で協働性・同僚性が育まれて行く。教育実習Ⅱ・Ⅲでも、役立つ学びである。

学生番号	233	名前	
コース・専修		グループ	H

**【コメントシート】**

月/日	回数	コメント(感想・意見・質問・要望・出欠など)	教員印
2/8	0	授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。	◎
4/12	1	授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。	◎
4/19	2	授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。	◎
4/26	3	授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。	◎
5/10	4	授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。	◎
5/17	5	授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。	◎
5/24	6	授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。	◎
5/31	7	授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。	◎
6/7	8	授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。	◎
6/14	9	授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。	◎
6/28	10	授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。	◎

7/5	11	授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。	◎
7/12	12	授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。	◎
7/12	13	授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。	◎
7/19	14	授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。	◎
7/26	15	授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。	◎
8/2	16	授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。	◎
8/9	17	授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。授業内容が濃く、進捗が速い。このペースで進めたい。授業準備が手際よく進んでいる。	◎

**【提出物チェックリスト】**

チェック	提出物	提出日
✓	春休みに取り組んだ宿題 ① 指導案・実例録	4/12 (金)
✓	春休みに取り組んだ宿題 ② レポート	4/12 (金)
✓	最も得意な学習指導案(プリント)	8/5 (月)
✓	最も得意な学習指導案(データ)	8/5 (月)
✓	代表者による全体研究発表Ⅰの感想(全体授業の振り返り)	7/26 (金)
✓	代表者による全体研究発表Ⅱの感想(全体授業の振り返り)	8/2 (金)
✓	教育実習Ⅰについての振り返り(自己評価)	7/26 (金)

【資料1：教育実習Ⅰコメントシート（Hグループ）】

この「模擬授業評価表」は、他の授業や教員採用試験対策チャレンジセミナー等でも使用されている。

学生1人につき、計3教科・領域の模擬授業を担当する。模擬授業の数週間前から、学習指導案の作成、教材・教具の準備、板書計画の作成等の教材研究に各自で取り組む。事前に各教科・領域の担当教員と相談し、授業化する教材の選択、対象学年の選定、学習指導案の作成、授業の進め方等について話し合いを持つ。学生たちは自主的に集まり、空き教室を利用していわゆる模擬模擬授業（模擬授業当日に臨む前に行う自主的な模擬授業）にも取り組む。空きコマや放課後等の授業外を利用した事前・事後学修が多くなる。

例えば図画工作では、題材に対する見通しを持たせ、児童の学習意欲を高めるために、事前学修では参考作品や掲示物を作成したり、教師による示範を練習したりする。その上で、模擬授業当日に臨む。深い教材研究が模擬授業成功の鍵となる(写真1・2)。

前稿で示した通り、図画工作科の授業を実践するために必要な資質・能力を「図工授業力」と筆者は定義している。図工授業力は、図工的教養と授業実践力の2つの側面から成り立つ<sup>4)</sup>。深い教材研究と高い図工的教養という確かな骨子があれば、たとえ児童が予想外の反応や表現をしたとしても臨機応変に対応することができる。深い教材研究と高い図工的教養は、授業実践力の基礎にもなる。大学での模擬授業、本実習の事前学修の段階でこのことを学生に気付かせ、教育実習Ⅱ・Ⅲに臨むための基礎になることを意図している。

模擬授業評価表(9月19日 教科算数)

授業者( )  
評価者( )

項目	具体例	評価
1 態度姿勢	① 授業内容に適した服装等を準備している。	4 3 2 1
	② 児童の目を見て話をしている。	4 3 2 1
	③ 児童の模範となる美しい言葉を使っている。	4 3 2 1
	④ 児童の発達段階に即した分かりやすい言葉を使っている。	4 3 2 1
2 内容	① 学習指導要領に則り、本時の目標を適切に設定している。	4 3 2 1
	② 本時のめあてを明示(板書)している。	4 3 2 1
	③ 多様な学習活動を取り入れている。	4 3 2 1
	④ 誤答やつまづきをうまく生かしている。	4 3 2 1
3 板書	① 正しい筆順で書いている。	4 3 2 1
	② 適切な文字の大きさで丁寧に書いている。	4 3 2 1
	③ 授業の内容を構造的に表現し、分かりやすく書いている。	4 3 2 1
4 発問	① 全員に聞こえる声で明確に発問・指示をしている。	4 3 2 1
	② 様々な考えを引き出す発問をしている。	4 3 2 1
	③ 児童の思考を深める発問をしている。	4 3 2 1
5 対応	① 学習の準備ができていることを確認して授業を始めている。	4 3 2 1
	② 児童の質問や意見等を大切に授業を進めている。	4 3 2 1
	③ 専門性の高い質問等にも的確に対応している。	4 3 2 1
	④ 一部の児童に片寄ることなく発表を求め、授業を進めている。	4 3 2 1
	⑤ うなずいたり、ほめたりしながら授業を進めている。	4 3 2 1
	⑥ 効果的な机間指導を行っている。	4 3 2 1
	⑦ 学ぶ姿勢や学習規律について、毅然とした態度で指導している。	4 3 2 1
6 時間	① 児童に発言・質問・活動の時間を適切に確保している。	4 3 2 1
	② 時間に遅れず、規律正しく授業を始めている。	4 3 2 1

4 よくあてはまる 3 おおむねあてはまる 2 あまりあてはまらない 1 まったくあてはまらない

【コメント】  
とても見ているので、早く授業だと思います。最初は何も取りあげてくれないので、良いと思いました。指導案の学習計画の5Rには評価がなくて、全と評価のみのだけ、それは教員です。机間指導について、前の人に見えて、各の仮30人にそれぞれ指導して通っている確認で、お礼も一言でも全員に声かけられたらいいかな、5Rに声かけの理由がわからなくていいかな。

【資料2：模擬授業評価表（算数の代表者模擬授業の例）】





【先輩 (27 期生) の「教育実習記録」記述例 No. 4】

教育実習のまとめ

<ol style="list-style-type: none"> <li>1 教育実習を通して深く考えた教育の課題。</li> <li>2 教育実習中に受けた指導全般についての反省。</li> <li>3 教育実習を終えて教師の使命をいかに考えたか。</li> <li>4 その他。</li> </ol>	<p>1. 私が実習を通して深く考えた教育の課題は、いくつかあります。まず、教員の仕方の問題です。私の担当していた学級は、27名の児童が、体育と音楽は専科の先生があられて、算数はT.Tでした。2つの教科の時間には空き時間にりますが、それも毎日あつてはなりません。先生は、毎朝時間をノートやワークテストの丸つけに費やし、一方でクラスの子どもたちをしっかりと把握してはいた。教員の仕事は日々だけでなく、教課後まで明日の授業の準備や学年部での打ち合わせと大変忙しく、いつも遅くまで残っておりました。K小では、教科によってT.T専科があられて、子どもたちは専科減らされていますが、すべての学級がそうではありません。教員が子どもに向き合っている時間はどれくらい持ててはいるかと考えました。また、K小には伊たりルールがあり、授業が5分間、教室にいられない児童や教室に行くとがてな児童を支援する制度がありました。担任が一人で見ようと思えば到底無理なので、とても良いと思いました。しかし、これほどどの学校にもあるとは限りません。小学校では、今後の学習の基礎を築いていかないと、いつか、早い段階からの支援が必要だと感じました。1人1人にとって、最適なサポートをするを目指し、子どもたちを大切に感じました。</p> <p>2. 実習中に「教科時間、児童時間、教師時間、児童時間」を「教科時間、児童時間、教師時間、児童時間」で区別し、授業を振り返りました。授業を振り返るにあたり、教員の原簿があらは、まず授業で「最大切だ」と思ったのは児童をしっかり知るということです。ただ、さあね！とほめてあげた、その意見、意見を認め適切に評価し、全体に返してあげて共有</p>
--	--

育として子どもたちに自尊心を持って積極的に学ぶようになりたいと思っ  
た。評価の仕方も全体発表の中でほめたり、机間指導の中で個別にほめ  
たり方法はたくさんありましたが、たくさんほめるためには、ほめる  
子どもを知り、じっくり見るのが大切だと、日々子どもの様子を見ていて  
つづに、子どもの興味、関心をいかに授業の工夫で、理科の場合なら、導入時  
の実験や、他教科では教師の発問で、教師に口を役あといわたり  
初手で「教員」にならうのは教師にとって大切な能力だと感じました。教師  
が、教える内容に面白さを見出し、魅了を伝えていかないと子どもは響か  
ないという気がしてきました。また、今日の授業で「指示」というと授業  
の中で大切だと思ったのは感じました。私は、指示の出し方でまだ足らな  
い部分が多く、指導がスムーズにいかず、指示が明確でなかった  
ため理解していない場面がほましたり、場面が多々ありました。  
これからは、指示の内容を極力簡潔に視覚的に分かりやすく、1コマの  
指示も明確かつ積極的に伝え、指示の後に子どもと全員が理解できたと  
のが確認しているように思いました。指示だけでなく、授業の中で多角的な  
声かけができようになりたいです。子どもの思考により、その発問を投げかけ  
子ども自身の授業が構成できるようにしていきたいと思っていました。

3. 本実習の間に、1日間の観察実習があり、その時教師とはすばらしい  
仕事だと思いました。しかし、今日4週間という長い期間の中で、授業の  
ことにより自分の仕事内容の大きさ、授業づくりの難しさ、実際の授業が  
思うようにいかない感じも感じられました。いろいろな学年の授業を見させて  
いただきました。子どもたちと実際に授業を行うことは全く別でした。うま  
くいかない自分で教師が弱まるのが不安になりました。しかし、それ以上に  
子どもたちから人々がとて可愛いく感じ、担任を呼ぶことすばらしいと感  
覚を持って子どもたちに接しておられる先生にも憧れを感じ教師という  
職業は輝かす。

★子どもの名前のみイニシャルにしてください(学校名、先生の名前は実名で可)。



【資料6：教育実習のまとめのサンプル】

【先輩 (30 期生) の「教育実習記録」記述例 No. 5】

10 教育実習にあたっての目標

私は児童と共に成長していくことのある小学校教師を目指して  
いる。成長する児童の姿に惹かれ、自らもそのよう児童と共に成長  
していきたいと考えている。元々小学校時代に、偶然と小学校教師と  
目指すことになったが、大学での学びから目指す教師像が少しずつ明ら  
かになってきている。大学2年時の5日間の観察実習では、主に「学校経営  
や組織運営の実際」「児童の実際に応じた指導」について学び、5000字程度  
の報告書にまとめた。2年時の模擬授業では、高い学びは何かに  
「学」の中で、児童理解、徹底した教材研究、応答的なやり取り、この3つを  
軸とした授業が大切であると学んだ。これらをもとに、今回、3つの目標を持って  
教育実習に臨むことにした。

一つ目は児童理解である。授業内外の児童の姿、生活態度や家庭環境  
も踏まえて、観点を広げて総合的に理解したい。そのために児童たちと  
関わる時間を多く持つために、積極的に自分から関わりたい。4週  
間という期間を最大限活用し、児童からの様々なサインをしっかりと受け止  
めたい。これは信頼関係を築く上にも必要。また、これは授業の質向上にも  
不可欠である。

二つ目は、授業力の向上である。「多さより」「児童の集中力」を身につける  
ための工夫をする中で、「楽しい授業」を目指したい。児童自身が  
気づき、考え、楽しいと思えるような授業である。その中で、学級の  
雰囲気をより良くしていきたい。児童が生き生きと学ぶような授業にする  
ために、児童の課題を踏まえ、教材研究をしっかりと行いたい。さらに、  
先生方が「児童の側に立つ」から「授業」を学ぶためにどのような  
工夫や工夫が、授業がけがされているか、ということにも視点を  
当てて学びたい。

授業力の向上の中でも特に道徳授業について学びたい。これまで  
私が受けてきた道徳授業は振り返ると、心に響くことが大切だと  
改めて思う。児童の心を揺さぶり、そして児童一人ひとりが主体となって、  
道徳的判断をいじめる。道徳性の育成に繋がる道徳教育の  
あり方を深く学び、自分のものにできるように努力し、授業力の向上に繋  
ぎたい。

三つ目は、観察実習で学んだ「学校経営」「学級経営」について、  
さらに学びを深めていきたい。学校・学級は組織として成り立  
ていることから、組織の一員としての自覚を持って学校・学級経営の  
あり方を学びたい。学校・家庭・地域の協力・連携についても  
併せて学びたい。

最後に、上記3つの目標をさらに深めるために、先生方から、児童  
との関わり方や学級づくり、児童同士の関わり方などについて学びたい。  
以上の目標を持って毎日過ごす中で、児童から学ぶ姿勢を  
大切にしたい。日々元気に笑顔で児童たちと接していきたい。これら  
3つの理解を深めることにより、今の自分に足りない部分  
を改善し、自分自身を磨き見直し見直すこと。これからの学習や  
研究に役立て、自分を成長させていきたい。

【資料7：教育実習の目標のサンプル】

【教育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(小)自己確認シート】

学生番号 ユ33	名前	コース・専修
教育実習Ⅰグループ H	実習校	実習期間 19/1 ~ 19/2

【教育実習Ⅰ】

提出物	提出日	自己評価
春休みに取り組んだ宿題① 指導案・実践例	4/12(金)	◎ ○ △ ×
春休みに取り組んだ宿題② レポート	4/12(金)	◎ ○ △ ×
最も得意の学習指導案(プリント)	8/5(月)	◎ ○ △ ×
最も得意の学習指導案(データ)	8/5(月)	◎ ○ △ ×
代読者による全体研究授業Ⅰの総括(全体授業の振り返り)	7/26(金)	◎ ○ △ ×
代読者による全体研究授業Ⅱの総括(全体授業の振り返り)	8/2(金)	◎ ○ △ ×
教育実習Ⅰについての振り返り(自己評価)	8/2(金)	◎ ○ △ ×

【教育実習Ⅱ・Ⅲ:事前】

内容	実施日	自己評価
実習校への事前訪問	8/19(月)	◎ ○ △ ×
教育実習Ⅱの振り返り(レジュメの再読)	9/28(土)	◎ ○ △ ×
実習目標の下書き	9/20(金)	◎ ○ △ ×
ゼミ教員による実習目標の添削指導	9/27(金)	◎ ○ △ ×
実習目標の教育実習記録への掲載	9/28(土)	◎ ○ △ ×
巡回担当教員への挨拶(該当者のみ)	/ ( )	◎ ○ △ ×
夏期休業中の45分間・模擬授業の実施(教科・領域(理算)関連)	9/ ( )	◎ ○ △ ×
教育実習記録への事前記入(目標・実践など)	9/28(土)	◎ ○ △ ×

【資料8:教育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ自己確認シート】

【教育実習Ⅱ・Ⅲ:事後】

内容	実施日	自己評価
教育実習記録のまとめ(P.98-99)の記述	10/29(火)	◎ ○ △ ×
教育実習記録の提出(実習校)	10/29(火)	◎ ○ △ ×
教育実習終了報告書の提出		◎ ○ △ ×
教育実習自己評価書の提出	11/4(月)	◎ ○ △ ×
茶封筒(研究授業の学習指導案)の提出(教科・領域(算数))		◎ ○ △ ×
実習校への礼状作成・発送	11/5(火)	◎ ○ △ ×
教育実習記録の振り返り(学サポ)	11/22(金)	◎ ○ △ ×
教育実習記録の整理(加味・修正)	11/22(金)	◎ ○ △ ×
教育実習記録の再提出(学サポ)	12/2(月)	◎ ○ △ ×
教育実習記録の振り返り・発行印刷(学サポ)	12/6(金)	◎ ○ △ ×
教育実習報告会レジュメの作成	11/28(木)	◎ ○ △ ×
ゼミ教員による教育実習報告会レジュメの添削指導	11/29(金)	◎ ○ △ ×
教育実習報告会レジュメの提出	11/29(金)	◎ ○ △ ×
教育実習報告会の参加(1日目)	12/10(火)	◎ ○ △ ×
教育実習報告会の参加(2日目)	12/18(水)	◎ ○ △ ×
教育実習報告会の参加(3日目)	12/20(金)	◎ ○ △ ×
教育実習報告会振り返りの作成	/ ( )	◎ ○ △ ×
ゼミ教員による教育実習報告会振り返りの添削指導	/ ( )	◎ ○ △ ×
教育実習報告会振り返りの提出	/ ( )	◎ ○ △ ×
本子チェックシートの提出(学サポ)	1/15(水)	◎ ○ △ ×

【資料9:2013年度小学校教育実習Ⅱ・Ⅲに向けて(メモ)(2013.7.5)】 徳本達夫

1. 模擬授業からの学び

模擬授業も最終段階。既に三つの授業を終えた人もいるだろうが、授業参観者としても有終の美を飾られたい。その上で、模擬授業からの学びとは何であったかを振り返られたい。授業をする上で不可欠な要素は何か。自分は何が足りないか。ここを考える。教職従事者に必要な省察という行為である。

2. 授業の構成要素

授業をする上で不可欠な要素は何か。3分ほど、考えてみたい。(以下、目をつぶって考える。はい、どうぞ。)

(3分経過。)

目を開けて続きを読む。以下の4つの要素からなる。①子ども研究(児童の実態、生育歴、家庭環境、人間関係等の理解に関する、より多くのかつ深い理解)②教材研究(授業とは、人類と民族が培ってきた文化遺産を子どもと共に学ぶなかで伝達・継承・発展させるための意図的な営みである。したがって、深い教材研究なくしては、質の高い授業はできない。)③時代・社会研究(①と②とは、時代・社会的背景等に関する理解を踏まえないと詳しいことは見えてこない。児童の成育歴や家庭環境のことについても、具体的なこととして見えてくるはずである。)④自己研究(授業をする、教職を目指す学生としての自分のことが分かっている人でなければ、上記の①②③の意味が半減する。授業の中での教師の説話等も児童の心に響くものは期待できない。児童理解に関しても、自己理解を踏まえない教員の児童理解は底の浅いものになる。)

以上は、私の見解。これ以外にもあるだろう。批判的に検討されたい。(協議項目にした。)

⑤として、応答力の研究というものもあるかもしれない。教材展開能力ともいう。しかし、これは上記の関連事項であるということであげなかった。

模擬授業の中から見えてきたであろう、授業を行う上で必要な構成要素に関して、自分はどの要素が、どのように課題としてあるのか。ここを振り返る。

児童への対応に関する要素については、実習Ⅶ等での学びも振り返ってみる。以下は極論を書く。模擬授業での児童役は20歳を過ぎた大学生のそれ。うまくいかなかったとしてもあまり気にしなくてもよい。生身の子どもは、もっと具体的な、生き生きとした存在である。その分、自分の予想を超えるような発言や行動をする児童がいることも事実ではある。しかし、そのような児童が教職を目指す学生を育ててくれる。

今回、児童役を担った学生は、どこまで具体的に生き生きとした児童を演ずることができたであろうか。あるいは、児童役を担った指導担当教員は、どうであったか。この点も、研究協議の対象になるであろう。(なったであろう。授業を正確に聞かずに、あるいは理解度の不足からの勘違いの発言もある。この児童役の役割は、具体的に現実味のある姿である。)

3. 教育実習Ⅱ・Ⅲの準備

先のことになるとはいえ、実習の目標は書いたのだろうか。実習の目標が念頭にあるからこそ、学びは具体的になる。これを意識していなければ、学びの原動力は生まれにくい。もちろん、実習は学習段階を経て行っている。それゆえ今回は、実習Ⅶ・実習Ⅰのそれを踏まえ、それらを超えた目標を書くことが期待される。

仮に現時点で叩き台を書いていないとすれば、本資料を読んだ今、すぐ書いてみる。第一次案である。そして、どこまでのことが書けたかを自分で確かめる。友人と交換する。こうした学びの繰り返しが教員としての資質能力の向上に繋がる。完成度は、実習直前が一番になるだろうが、大幅に変わるといったことは考えられない。したがって、先延ばしは、ろくなことがない。すぐ、書く。(自戒を込めて。)

その際、実習Ⅶの報告書を読み直すという作業は欠かせない。実地体験をしたのだから。自他の経験から学ぶという姿勢が人を育てる。

ある程度書き終えた時点で、参考程度に先輩の日記を読ませてもらうことも考える。順序は、この順番。逆ではない。先輩のそれを見せてもらって、それを写すなどという行為は、その姿勢だけでも教職志望者としてはいただけない。先輩のそれは、時間をかけて、悔し涙を流した結果としてのそれであって、そのような過程を踏まえないものは、実習に行ってから自分のものになっていないことが分かってうろたえる。

日記を見せてもらうことは、むしろ、自分から先輩にお願いする。(この件に関して、教員からお膳立てすることはしない。そのような教員の行動は、結果として学生が伸びることに結びつかない。必要に迫られてこそ、人は力を付ける。実習に行くのは、学生本人である。生身の子どもは、とてもかわいい。魅力的である。本気でやった分、子どもが実習生を化けさせてくれる。子どもも、実習生との出会いによって化ける。指導教員も同様である。お互いに化けることができるかどうか。これが学びの極意。)

#### 4. 目標をゼミ担当教員に一読してもらう

目標をゼミ担当教員に一読してもらう。指導も請う。

実習Ⅰ担当教員に対しても、複数の立場からの指導をもらう意味で一読してもらうこともあり。(その前提として、学友との交換も欠かせない。)

この作業が実習に向けての実習生全体の意識を高めることにつながっていく。手抜きなく。

#### 5. 大学授業の見直し

実習は、大学での学びが前提になっている。したがって、当然学ぶべきことを学んでいなければ、質の高い実習は難しい。大学授業の見直しが必要になる理由である。関連授業を振り返る作業も必要になる。模擬授業のなかでもこの作業はしてきたであろうが。

道徳に関して言えば、今回の模擬授業の児童の設定としては、特別な支援を必要とする児童は想定されていなかった。しかし、統計上、実際の学級にはそのような児童は6パーセントいるはずである。そのことを認識しているかどうかは、実習の質を左右する。

余談ながら、特別支援教育を履修していない学生は、「大学で教えられていない」などと応えないこと。正直に、事情で受講しなかったけれども、卒業までに受講して理解しておくこと。本学で特別支援教育の授業が実施されていることはご存知だから。

#### 6. 『文教教育』にも目を通す

これまでの先輩の学びの一端は、『文教教育』にある。参考以上のものになるはず。一読して、価値を見いだせなかった学生は、申し出られたい。

#### 7. 代表模擬授業のこと(重要)

2回にわたって代表者による模擬授業(45分方式)を、例年同様、実施する。希望者は申し出られたい。

希望者の例。15分の模擬授業で物足りなかった学生、うまくいなくて再挑戦したいと思う学生、さらに磨きをかけたいと思う学生、友人から刺激を受けた学生、等々。要するに、誰が代表者になってもよい。いかなる授業であっても、授業から学ぶことは多々ある。

今年度は、受講生が多い。したがって、学生の割合からすれば、6人は代表模擬の機会を保障してもいいのではないかと、個人的には思う。しかし、日程の関係上、例年同様、4名限定となっている。倍率は高いとはいえ、遠慮は不要。力を付けたいと思う学生は資格あり。力をつけなければならない学生も、資格あり。要するに、すべての学生が資格ありということ。

と、個人的には思う。しかし、日程の関係上、例年同様、4名限定となっている。倍率は高いとはいえ、遠慮は不要。力を付けたいと思う学生は資格あり。力をつけなければならない学生も、資格あり。要するに、すべての学生が資格ありということ。

むしろ、半数の学生の前で本番に近い授業をするのだから、相応の準備は必要になる。指導案の改訂もちろん、リハーサルも1度ではすまないだろう。しかし、何度もいうが、全員が実習に赴くのである。今回、代表模擬をすることができなかった学生も、別途、自分たちで45分の授業を、本番までに何回かは経験しておくことは大前提のことである。自分たちでやるか、授業の一環としての中でやるかの違いだけである。授業の一環としての代表模擬は、諸条件は整っている。活用しない手はない。

人は、その気になることはできるが、その気にさせることはできない。その気になった者は、成長し続ける。実習Ⅶで出会った子どもたちは、いずれも、成長し続ける子どもたちであった。そのような子どもと4週間にわたって学びあう。気後れしては話にならない。少なくとも、たった5日間の観察実習でもより多くのものを学んだ。同時に、もっと学校で学びたいと思った学生である。その時の思いを、形にすることは半年前の自分の思いに誠実に応えることである。怖気づいてはもったいない。実習Ⅶの報告書の印刷と配布が、同時展開できた初めての学年であった。分量的にも最大のもの(30万字以上)を読ませることとなった初めての学年。ひとえに学生数が多いからであるが、量は質に転化する。このことも、『文教教育』の関連資料に記した。より多くの学生とともに学ぶことができている学年であることをもっと積極的に活用してもいい。場合によっては、近い将来、同業者として最も多く仕事に従事することにもなる可能性がある。

話が飛んだ。さて、現実問題。全員が希望された場合は、抽選か、話し合いにすることになる。参考までに、2012年の道徳は5人の学生がチームを組んで担当した。指導案の構想を5人で練り、実際の授業では、授業者、子ども役、ゲストとしてそれぞれの役を果たした。応用は利く。実践力の問題である。10人が希望しても面白い。知恵はいくらでも出る。(詳細は、『文教教育』にある。参考以上のものになるはず。)

大学で燃えなくて、実習先で燃えるという学生もいるだろうが、大学の代表模擬をしたからと言って燃え尽きるほど、内部燃料が乏しい学生ではないはず。燃え始めると、周囲からさらに燃料を得るとというのが、燃える人の場合。燎原の焔を期待している。

話しがくどくなってきたから、ここでおしまい。早い話、全員が希望すればいいこと。対応は次の問題になる。希望者がいないことのほうが厄介である。

#### 8. 実習報告会のこと

実習後の報告会の研究討議の柱を何にするか。この点についても、『文教教育』の中に参考として書いてある。目標の参考にもなるはず。いずれも、質の高い学びを志せば、活用できる資料である。それらは踏襲するための資料ではない。それら乗り越えるための叩き台としての資料である。また、そのために作成した。実習希望者がどこまでの活用ができるか。それは、各自のこれまでの学びの質にかかっている。それは又、教員の指導の質でもある。

委員会は動き出してはいるが、委員任せにしないこと。実習には全員が行くから。

## 9. 実習Ⅰ春季課題の図書・指導案の活用

時間をかけて作成した課題。今回の実習に活用したい。読み直すことも考えてみたい。学友同士の上報交換も。万一、

まだということであれば、即刻実現させたい。学びあう関係は、教職従事者にとって最低限の要素である。これらはすべて、人間科学基礎演習の中で説明したこと。(以上)

### 【資料10：実習記録帳の記録について～実習の充実に資する記録の充実へ向けて～】 徳本達夫

#### 1. 記録というもの

教員の専門性の一つに記録の作成がある。教育実践の質は記録の質によって高められ、記録の質は、省察の質によって深められる。省察性は記録を基にした振り返りである。記録を基に同業者との相互検討も可能である。その意味で記録の充実が学びの充実と同様の重さを持つ。

記録する力はこれまでも指導してきた。事実の部分、考察、疑問等の部分は教育実践を正確に観察する力、それらを文章化する力が必要である。考察、疑問等の記録については、批判的精神を持った学習能力が不可欠である。実習での記録は、その意味で実習生の学びの総体が露わになる。

教室型の学びと違って、野外型の学びである実習での学びは実習生の主体性がより求められる。全体把握力も重要である。柔軟な、文化人類学的な学びの姿勢を欠くと、深い対象理解に繋がらない。身体に刻み込まれる学びはある。その学びがさらに広がりや深まりに繋がっていくためには、その学びが記録化されることが不可欠である。記録の意義は既に教育実習Ⅶにおいて体験的に学習しているが、再確認の意味で本年度、実習記録帳の記録充実のために教育実習Ⅰの段階で各種資料を配布・指導した。それぞれの意図は以下である。

#### 2. 記録の対象と方法

①実習の目標 実習Ⅶの学びを踏まえ、それを発展させる形で記載する。実習の段階性・継続性・発展性である。さ

らに、教職志望の動機と絡めて目標を記載する。実習校の指導担当者に対する自己紹介の一環でもある。実習生自身、教職志望動機を自己確認することによって目標がより具体的になる。ゼミ担当教員の指導も受ける。先輩の実習記録帳を借り受け、一読する。疑問点があれば、当の学生に質問もできる。

②日録 日々の実習内容を簡潔にかつ過不足なく記録する。考察欄に関しては、時間経過に伴う事実の羅列ではなく、事実の経緯を踏まえつつ、エピソード記録となることを意識する。その際、指導教諭の所見は実習の質を高めるために重要である。指導の甲斐があるように充実した実習とその記録化に努めたい。

③実習先での講話の記録 大学での学びを踏まえつつ、講話内容を簡潔にかつ過不足なく記録する。

④実習校の先生方の授業参観記録 授業の意図、発問、児童の反応とそれへの授業者の応答のかわり等、意識を集中させて参観し、記録化する。

⑤実地授業の記録 実地授業においては、指導案のみならず、実際の授業の記録を赤字で追記するほか、授業後の考察、指導担当教諭からの指導助言内容を簡潔にかつ過不足なく記録する。

⑥実習の総括 実習の全体を振り返り、その学びと今後の課題等を明確に具体的に記録する。

第15～16講では、2回にわたり代表者による全体研究授業を行った。45分間の模擬授業とその後協議会を行った。例年、学生自身の立候補、担当教員の推薦により代表者4人を決定し、2グループに分かれて模擬授業を行う。今年度は、学生からの立候補はなく、4人とも担当教員からの推薦であった。第15講・全体研究授業Ⅰでは算数と国語、第16講・全体研究授業Ⅱでは社会と理科を行った。児童役となる各グループの学生は、第1～4クールまでで体験していない教科・領域の模擬授業の方へ参加した。

第17講では、授業全体の振り返りと学習のまとめを行った。担当教員からの気づき、総括、激励を行い、教育実習Ⅱ・Ⅲに向けての意識化を図った。筆者は、図画工作科の模擬授業について総括した。どの学生も教材研究がしっかりできており、性質の異なる複数の参考作品を用意することができていたこと、授業者自身が楽しんで授業することができていたことについては高く評価した。教材研究が遅れ気味だった学生もいたことは、改善すべき点であると伝えた。教育実習Ⅱ・Ⅲに向けては、指導担当教諭から引き継ぎ、途中から関わる図画工作の題材でも、教材研究を行うことが大切であると学生に伝えた。題材自体は指導担当教諭のものでも、授業自体は実習生本人のものである。教材研究を通して自分で体験し、自分のものになっていない題材を児童に指導することはできないと、図画工作担当の見地から強調した。このことは、教材研究・学習指導案作成における基本的姿勢・原則である。担当教員のコメントの後、グループ毎に学習指導案を提出し、「教育実習Ⅰ 全体についての振り返り」という自己評価シートに記入して終了した。

夏期休業中には、グループで自主的に模擬授業に取り組んだ。例年、第1～4クールで授業をすることができなかった教科を中心に、夏期休業中に模擬授業に取り組んでいる。協働性・同僚性・主体性を養う取り組みである。代表者しか体験できなかった45分授業にも取り組み、教育実習Ⅱ・Ⅲに備える。自己確認シートの記録によると、提出学生の8割が算数・国語・道徳を中心として主体的・自

主的に45分授業に取り組んでいる。そのうち8人は2～4教科・領域を実施しており、その他は1教科・領域を実施している。今年度は、算数の45分授業を実施した学生が最も多かった。(佐伯)

## 2 平成25年度・教育実習Ⅰ（小学校）の成果と課題

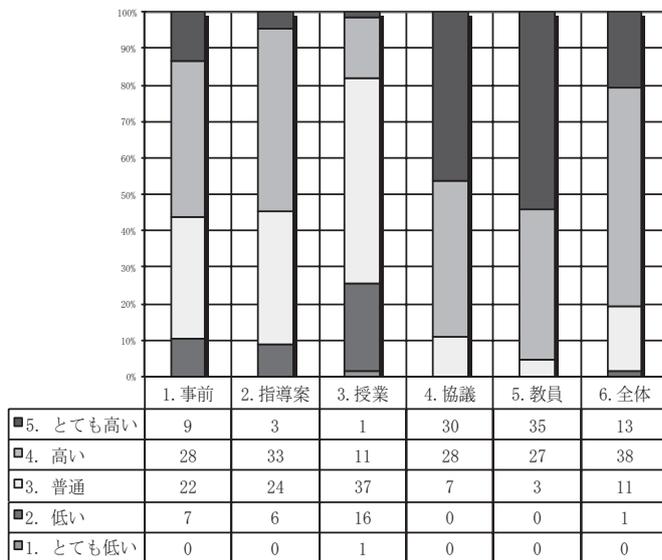


図1 【グラフ：自己評価シートの集計結果】

第17講で学生に提出させた「教育実習Ⅰ全体についての振り返り」という自己評価シートの結果をもとに、教育実習Ⅰの成果と課題について考察する。①模擬授業に向けた事前準備、教材研究等の取り組み②指導案の作成③自分の授業④グループでの協議の仕方⑤各担当教員の指導⑥全体を振り返って、の6項目について5段階で満足度、およびその理由等も自由記述させた。結果は、⑤各担当教員の指導④グループでの協議の仕方に対する満足度が高く、②指導案の作成③自分の授業に対する満足度が低い結果となった。以下、各項目について成果と課題を明らかにする。

### (1) 模擬授業に向けた事前準備

満足度が高い学生は、余裕を持って教材研究や模擬模擬授業に取り組み、本番に臨むことができたという回答が多かった。満足度が低い学生の多くは取り組みが遅く、事前準備が不十分であったことを理由として挙げていた。少数ではあったが、予定通りに模擬授業を実施できなかった学生もいた。ここ数年、教育実習Ⅰの履修を含めた本実習参加要件を満たすことができず、配当semesterで教育実習Ⅱ・Ⅲを履修できなかった学生も数名いる。入学後から、教育実習に向けた段階性・主体性・省察性を育成する取り組みが必要とされる所以である。とりわけ、段階を追って学生の意識を高めていくことが重要である。下学年の段階から、近い将来次の段階に進み、授業者の立場になること、その段階はすぐに来ることを意識化していく必要がある。教育実習Ⅶの事後学習会、教育実習Ⅱ・Ⅲ報告会に1年次から参加することで、学生に教育実習への見通しを持たせたい。報告会への参加は、学生の平素の授業の受け方を意欲的にする。筆者は、図画工作の授業の初回・最終回などで、次の授業や教育実習とのつながりを意識させ、学びを架橋する取り組みを重視している。平素の大学授業を真剣に取り組めば、自ずと教育実習の事前学修になる。全ての授業でそうなれば、学生にとって質の高い学びを保障できる。

教材研究の不十分さを反省点として挙げていた学生は、その理由として模擬授業で取り扱う教材・単元だけでなく、当該分野の既習・未習事項の理解不足を挙げていた。既習事項の理解不足については、教員側の課題でもあろう。学生の実態を踏まえた授業展開が求められる。理解不足の学生に対しては、正規の授業時間外に補習授業のような取り組みが必要であろう。

学生にとっては、配属児童の一年間の学習課程を踏まえた教材研究が必要になるだろう。全教科・領域の教科書・副読本を一読することも求められる。児童の既習事項と絡めた授業展開が可能になる。児童に重層的な学習が提供できる。

模擬模擬授業を行った学生の中には、本番の模擬授業と同じグループで行ったものもいたようであ

る。模擬授業が単なるリハーサルとなってしまっただけでは意味がない。授業は、常に臨機応変な対応が求められる。ゼミの仲間等、教育実習Ⅰのグループとは別のメンバーで模擬模擬授業を行うよう全体会で促す必要がある<sup>5)</sup>。同じグループのメンバーによる模擬模擬授業であったとしても、児童役が常に発言や反応を変えていく必要がある。

## (2) 指導案の作成

満足度が高い学生は担当教員による添削を2回以上受けることができたと述べる等、早目の提出を心がけていた。しかし、最も重要なのは、学生自身が教材研究に十分時間を割くことである。深い教材研究をしたからこそ、教員の指導や添削の回数が増えたのである。本気で取り組んでいたことの証である。反省点としては、オリジナリティの不足、教材観等の記述不足が挙げられた。オリジナリティの不足は、教材研究不足が原因である。教材観等の記述不足も同様である。児童観・指導観の記述不足は、児童理解研究の不足が原因である。春期休業中の課題では、学習指導案・先行実践例の収集を行った。その資料を比較検討しないで、あまり手を加えないまま流用した学生は、満足度が低かった。なお、少数ではあったが、担当教員による書き方の指導の違いを課題として挙げている学生もいた。学習指導案の書き方の基本さえ学んでおけば、あとは応用すれば対応できるはずである。

## (3) 自分の授業

他の設問に比べて最も満足度が低い結果となった。学生の自己肯定感の低さもあるが、むしろ省察性の高さによる結果だと前向きに捉えたい<sup>6)</sup>。自身の課題が明らかになった分、成長の材料となりうるからである。課題としては、教材研究の甘さ、曖昧な発問、不十分な板書（文字の大きさや字形、筆順、筆圧、バランス、書くスピード等）等が挙げられた。

教材研究には甘さがあるものの豊かな表情や声かけ等のコミュニケーション能力が高い学生と、教材研究はしっかりしているものの教師主導になりがちな学生という両極が見られた。図画工作の場合でいえば、前者は授業実践力の高い学生、後者は図工的教養の高い学生ということがいえよう<sup>7)</sup>。コミュニケーション能力と教材研究、両者のバランスのよい学生が、自身の授業への満足度も高かった。準備不足であると、自信のなさが不安や緊張につながるようであった。上がり症であるため笑顔で授業することができなかったこと、臨機応変な対応ができなかったこと等も課題として挙げられていたが、教育実習Ⅱ・Ⅲの中で場数をこなすことである程度克服できるものと思われる。

## (4) グループでの協議の仕方

満足度が高かった。模擬授業のよかった点だけでなく、改善点についても指摘することができ、高め合うことで成長につながったという回答が多かった。グループのメンバーから異なる視点でアドバイスを伝えてもらうことができ、参考になったという感想が多かった。回を重ねる毎に、協議の内容も深まっていったようであった。この協働性・同僚性が初等教育学科の学生の持ち味であり、ゼミや教育実習Ⅶでの学びの成果でもあろう<sup>8)</sup>。

## (5) 各担当教員の指導

最も満足度の高い結果となった理由は、指導案の添削や協議会でのアドバイス等、丁寧かつ熱心に指導して下さったというものが多かった。しかし、学習指導案の書き方に対する指導が教員によって異なっていたという意見も僅かではあるが認められた。担当教員間で、共通理解を図る必要がある。共通理解とは、学習指導案の様式を統一することではなく、学習指導の本質を踏まえ、なおかつ臨機応変に対応できるような応用力を身に付けさせることである。

## (6) 全体を振り返って

全体の約19%が5、約57%が4、約16%が3、約1%が2という結果となった。この項目では、自分の取り組みや今後の課題、教育実習Ⅰについての要望も記述させた。

自分の取り組みについては、教育実習Ⅰを通して自身のいいところと克服すべき課題とを見付けることができています。学生自身の今後の課題としては、夏期休業中に事前準備、教材研究や模擬授業を行い、教育実習Ⅱ・Ⅲに備えたいという回答が多かった。目前の教育実習Ⅱ・Ⅲのみならず、残され

た学生生活の中でどのような取り組みをしていくべきか、考え直すきっかけになったようである<sup>9)</sup>。

教育実習 I についての学生からの要望には、自分のゼミの教科も模擬授業できるようにして欲しいという意見があった。2年次からの「教科教育学演習」の中で模擬授業を実践しないゼミ（専修）もあることから、このような意見が出た。特定の専修生が集中するというグループ編成の偏りを改善できないかという意見もあった。この点については、グループ決めを行う第0講において今まで以上に意識させることで改善したい。模擬授業の講義を、2年次にも入れてほしいという意見もあった。2年次の各教科教育法で、これまで以上に模擬授業を取り入れる方法もあるだろう。15分の模擬授業を延長してほしいという要望も複数あった。授業全体の流れがつかめず、導入のみに力のこもった授業になってしまうという理由が挙げられた。導入も大切であるが、時間をかけ過ぎて授業の本題に入ることができないまま終了してしまうようでは意味がない。次年度からのカリキュラム改訂により、模擬授業時間の延長が実現可能になる。15分間の模擬授業でやるべきことは何かを明らかにした上で、時間変更についても前向きに検討したい。15分間の模擬授業でやるべきことは、徹底した教材研究を踏まえた柔軟な授業展開を体験的に学ぶことである。

## おわりに

教育実習 I における模擬授業体験を通して学生に形成すべき学習観点がどこまで達成できているか、成果と課題とは何かについて考察してきた。

その他、教育実習 I 主担当が感じている課題としては、全体研究授業の代表者選出の際、学生からの立候補がなかったことが挙げられる。今年度の代表者は、「いろいろな人から意見をもらうことで、自分が思い込んでいたものがあつたことに気付いた。自分が考えたことなどについて、様々な視点を持って色々な表現の仕方や考え方というものを見つけていきたいと思う。」「学習規律の大切さが良くわかった。他にも指摘されたところを改善できるように頑張りたいです。色々な意見をもらえて、とても参考になりました。」「終わる時は色々な思いが溢れてきて涙が流れました。みんなからの“よかったよ”“お疲れ様”“感動したよ”の言葉は、大きな自身と誇りです。もらった評価表や数々のアドバイス、何度も練り直した指導案、授業グッズは私の宝物です。」と述べている。「特に、代表模擬は不安と緊張でいっぱいだったが、自分のステップアップのための貴重な経験となった。」という授業者の感想もあった。例年、代表者の選出には苦心する。準備等も大変であるが、授業後の代表者自身の満足度は非常に高く、学習成果も大きい。複数の立候補者が出てくるよう、学生の主体性・自主性を喚起することが担当教員全員の課題である。

以上は、教育実習 I 主担当教員による成果と課題についての考察であった。続く（Ⅲ）では、学生が、外部の実習校ではどのような評価をされてきたのか、明らかにする。（佐伯）

## 引用・参考文献

- 1) 佐伯育郎「小学校教育実習」（岡利道他編『初等教育学入門』広島文教女子大学初等教育学科，2009年所収）
- 2) 山崎英則編著『教育実習完全ガイド』ミネルヴァ書房，2004年。神津弘之は、教育実習の時期・期間には「一括集中方式」と「分散・積み上げ方式」とがあり、全国的には後者を採用する大学が多いと言及している。「分散・積み上げ方式」とは、教育実習を一時期に集中させるのではなく、数年間にわたる教育実習のカリキュラムを設定し、教育に関する理論・実践を段階的に高めていくことを意図しているものである。
- 3) 佐伯育郎、徳本達夫「教育実習指導の現状と課題～教科専門（図画工作）・教職専門（教育史等）の観点から」（『広島文教女子大学教職センター年報』2013年創刊号 広島文教女子大学教職センター，2013年所収）
- 4) 前掲書3）43ページ。佐伯は、図画工作科の授業を実践するために必要な資質・能力を「図工授業力」と定義している。図工授業力は、図工的教養と授業実践力の2つの側面から成り立っていると考えている。図工的

教養と授業実践力を兼ね備えた教師を「図工授業力のある教師」として自分なりに定義し、4年間の授業を通してその育成を構想している。

- 5) 山崎英則編著, 前掲書, 15ページ。川合春路は「児童・生徒は、生きた人間として、つねに変化する相手です。授業者は、その変化に即応しつつ、臨機応変に、しかし、指導目標を見失うことなく学習指導（授業）を進めていかなくてはならない、という柔軟なあり方を求められるものです。」と述べている。
- 6) 今津孝次郎『教師が育つ条件』岩波書店, 2012年。今津は、指導力不足教員の特徴として自己評価が割に高いことを挙げている。指導力不足教員は自分を客観的に眺めることのできる多様な視点が身に付いていないことが多く、自己中心の主観的基準しかないから自己評価が高くなると指摘している。
- 7) 前掲書3) 43ページ。
- 8) 前掲書6) 61ページ。今津は「教員各人が個性をもちながら同時に共通する学校教育課題に向けて各自が異なる力量を発揮してコラボレート（協働）するような教員集団が探求されるべきである。それが「協業」としての教職にほかならない。」と述べている。教育実習Ⅰは、本学科学学生の協働性形成に資すると考えられる。将来、協業に参画できるための素地を培うことができると筆者は考える。
- 9) 藤岡達也『先生になりたいあなたへ—教員採用試験の突破からライフワークとしての教職を考える』協同出版, 2009年。本書も強調するように、自分が教職に就き、授業やクラスを任されたとき、どうなっていなければならないかを考え、卒業時の自分と現在の自分との差を埋めるために必要な行動をすることが大切である。教育実習Ⅰは、その契機となりうる重要な授業である。だからこそ、実践力の形成に結び付く授業を創造したい。